

り最初は不安なことだらけで、入試、語学に次いで、もし大学に受かって、住む所はすぐ見つかるだろう、どの地域が治安が良いのだろうか、ということが心配でした。

ケルンの場合は、田舎でもなく、かと言ってベルリンやハンブルグなどの大都市よりは小さめの街なので、ドイツの中でも治安は良い方で、なおかつ交通の便も良く、大きな百貨店もあり、とても住みやすいと感じました。しかし、スリや置き引きは、やはり日本とは比べものにならないくらい多いので、荷物だけはチャックを開けられないように、いつも気をつけていました。でも、留学生生活3年半の間で、2度だけ、チャックを開けられてドキッとしたことがあります。幸い何か取られる前に気付いたので、2度とも地下鉄から地上に上がるエスカレーターで発生しました。自分の中で「まさかこんな所で」という意外な場所だったので、スキがあったのかも思えません。みなさんも気を

つけてください。

さて、現地での部屋探しですが、最初に知人の部屋を借りさせてもらいました。毎週出る部屋情報ばかりを載せる新聞を見て電話で交渉したのですが、「音楽をしてるので、音出し出来ずか？」と尋ねると、断られたり、なかなか見つかりませんでした。結局、間借りしていた部屋の大家さんを訪ねて、たまたま空きがあり、そこに落ち着きました。部屋探して日本と違う点は、日本だとはっきり「音出し可」と物件に表示されているので、分かりやすいし、音出しの時間の制限はあっても、入居した後に「やっぱり音出しはできません」ということは、契約上はほとんどないと思います。しかし、ドイツの場合は、大家さんが良いと言っても、隣人から文句が出たりして、音出しできなくなったり友人がいました。逆に、いつも隣近所が大音量で音楽をかけたたり、よく騒ぐような環境ですと、夜中まで弾いていても文句は言われませんでした。結局

は音が出せるかどうかは、隣近所の方が次第です。で、周りの様子を見て聞いて判断するのが良いと思います。ただ、ドイツの規則で、昼の1時から3時まで、シエスタで静かにしていないといけないので、それは守らなければいけませんでした。また、私は順番待ちが多く断念しましたが、寮に入るのも良い方法だと思えます。ケルンの場合、寮に分かりませんが、寮を希望される方は前もって早めに順番待ちの予約をされる事をお勧めします。

余談ですが、部屋を引っ越す際は、部屋中の壁を白いペンキで（天井も）塗り直して出なければいけません。友人に手伝わしてもらった新聞紙やビニール袋を敷き詰め、全部の壁をローラーや刷毛で塗りなおしたりして大変でしたが、今となっては楽しい思い出となりました。日常生活の中でもたくさん貴重な経験をすることが出来ました。

団の客演コンサートミストレスをさせて頂いていました。現在は、拠点を東京に移し、NHK交響楽団の契約団員として研鑽を積んでいます。そのほか日本ブラームス協会主催の室内楽や小澤塾オペラプロジェクト、サイトウ・キネン・フェスティバルに参加したりなどとても良い経験、勉強が出来、おかげさまで充実した毎日を送っています。



（00年度助成・声楽） 諸田 広美

先月、3年ぶりにイタリアにやって来ました。実は私の経歴は少々変わっていて、以前も4年間の留学経験があります。折角寄稿の機会を頂いたので、プロフ

てください。
<http://www.hironinorota.com/>

「留学生生活を終えて」



（00年度助成・ヴァイオリン） 上野 真理

私が留学を決意したのは、丁度いくつかの機会が重なった頃でした。公開レッスンで、「もっとクライスラーのリズムを勉強した方がいいよ」とR・リッチ先生に言われたり、初めてオペレッタを観たのがシュトラウスの「こうもり」だったり。当時ピアノニストの友人がウイーンに住んでいたことも手伝って、自然とウイーンに行こうと思えました。初めて街に降り立ったのは6月で、トランクにはセーターが一枚も入っていないのに、8月にはずいぶん

ミラノ・ヴェルディ音楽院三年生に編入学し、競争社会での勉強が始まりました。しかも、当時私は唯一の日本人。イタリアは試験の合格よりも点数で実力を判断し、点数が満たない場合は合格しても学校から除籍され留年もできません。また多くの試験は少人数の審査員で口頭問答式ではないので、そこにイタリアの音楽社会やイタリア人の突拍子もないことを思いつくある種の賢さの由縁があるのかもしれない。勉強量は日本の方が多いのに、入学する方が大変で後はぬるま湯状態の日本の大学生活とは精神的にかなり違います。

謝です。あの1年がなければ、今の私はなかったと言えます。反面、年数が増え良い勉強ができるほど、成果をどう披露したらいいかという思いが募りました。まだヨーロッパで歌い自活できるほどの実力はない。ならば、日本に帰らなければ。自分は日本で声楽家として何もしていない。そこで、東京藝大大学院受験を思いつき、声楽科でもオペラ科という日本の音楽界の錚錚たる教授陣がいるコースに通いました。しかも、林康子教授に師事したので、イタリアでもできなかった勉強をすることができました（イタリアで吸収したものを消化・実践したと言いますか）。

院修了後は二期会研修所に通い、修了と同時にデビューさせて頂き、出発前にオペラ「ジュリアス・シーザー」の準主役を演じました（修了同時のデビューは稀）。今振り返れば、私の経歴、特に帰国してからの3年は無駄がなかったと周りも言いますが、結果が出るまでの特に前回の留学中は

と肌寒い日もあり、レッスンの帰りに先生が貸して下さったセーターや上着がとても暖かかったことをよく覚えていきます。

私が入学したウイーン国立音大では、先生が2週間に1度はクラスの弾きあい会を開催して下さり、授業にとっても熱心でした。まじめな学生が多く、恵まれた環境にいましたが、結局10回近く参加することになったオケのツアーで得る事もとても多かったように思います。ここでは、前の席にドイツのオケのコンマス達や元イスラエルフィル主席のメンパーなどがいて、後ろに学生が座って、学生はソロの勉強と演奏の機会を与えられる、というものでした。音楽祭では野外ホール、石のホール、全く響かない劇場を周り、そのたびに、ホールを見ただけで残響を言い当てるメンパーには驚かされてばかりでした。

夜になると、個々の練習を終えてみんなで街へ散歩に出かけるのですが、その時の話題が政治情勢や国家の意識の問題などで、歴史